もしもの時のいのちのために

―西条市の救急医療―

具合が悪くなったとき、
あなたはいつ病院に行きますか。
もしかして、コンビニに行くような軽い気持ちで、
夜間などの診療時間外に病院を受診していませんか。
そういった受診が今、西条市の救急医療の現場を圧迫し、
自分が一刻を争う緊急の場合に
病院にかかれなくなる事態を発生させるかもしれません。
私たちの安心・安全な生活を支える
地域の救急医療を守るために、
私たちがどう行動するべきなのか考えてみましょう。

問合せ 健康医療推進課
TEL 0897-52-1395

疲弊する医療の現場

当市では、症状や緊急度によって受診する医療機関を区別し、24時間受け入れ可能な救急体制を守っています。

しかし近年、緊急性が低いのに、二次救急を利用する人が増えています。昨年、救急車で搬送された患者の約4割が軽症でした。このような利用は、医療現場を疲弊させ、医師や看護師の不足を加速させます。夜、緊急の処置が必要なのに、対応できる病院がないから朝まで待たないといけない、救急車に乗っても、受け入れる病院がないから市外の遠くの病院に行かないといけない。そのような状況を防ぐため、私たちは、医療を支える人員は限られていることを意識して、上手に医療機関を受診しなくてはいけません。

1人の医師が対応
―晩約14人の救急患者

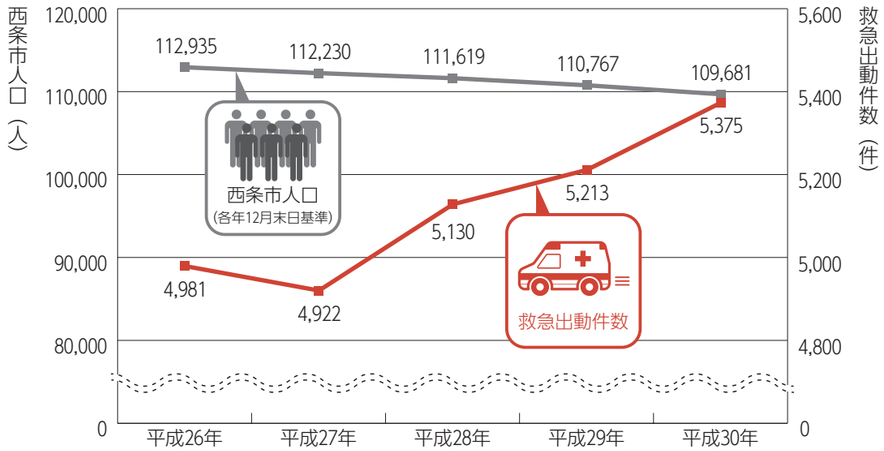
昨年度、当市の二次救急受診者は5,238人。休日夜間急患センターや在宅当番医が診療を終えた後、平日は22時、休日は18時から翌朝9時までの急患は二次救急病院が受け入れます。平均すると1時間に1人以上の患者が来院し、担当する医師たちは十分な休息がとれません。

救急医療体制の役割

症状・緊急度		
高	三次救急	生命にかかわるようなけがや重症患者、一次・二次救急から紹介などの**重篤患者**に対応。 ○東予救命救急センター　○大学病院
	二次救急	**緊急手術や入院が必要**な急病患者に対応。原則、救急車での搬送患者が対象。 ○市内6カ所の二次救急病院（輪番制）
低	一次（初期）救急	**発熱や軽いけが**など、外来で治療できる比較的軽症な患者に対応。 ○休日夜間急患センター　○在宅当番医

15人で支える、一日約15件の救急出動

救急出動件数と人口の動き



1日当たり15人の救急隊員が市内全域をカバーしています。直近4年で人口は約2.9%減少しているのに対し、救急出動件数は約8%増加しました。約1時間半に1度出動する救急車ですが、このペースで出動が増えると、どうなるでしょうか。

西条市 救急の現状

高齢化する今後の医療

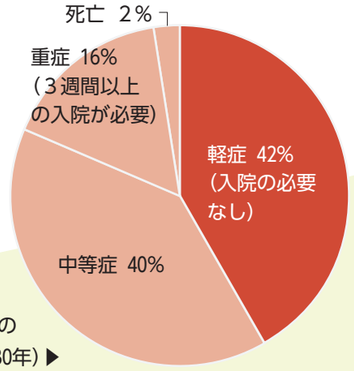
休日夜間急患センターでは、年間1万人近くの患者を受け入れています。勤務するのは地域のクリニックの医師たちで、平均年齢は62歳。医師たちも高齢化しています。定年などで医師が減ったとき、私たちの受診方法が変わらず現場に負担をかけ続けていたら、当市の医療体制は崩壊してしまいます。

加えて、休日や夜間の受診費用は、日中に比べると割高です。検査なども十分にできないことがあります。緊急時以外は時間外の受診を控え、自分の負担も減らしましょう。

42%
は軽症患者

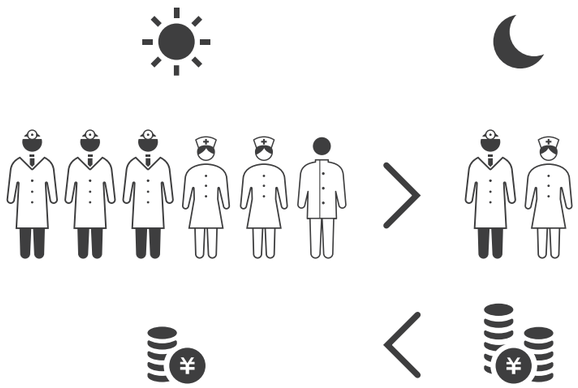
昨年、救急車で搬送された5人に2人は、救急車を呼ぶ必要がなかったかもしれません。

救急車で搬送された患者の傷病程度別の割合（平成30年）▶



実は時間とお金
がかかる休日・夜間

休日・夜間の時間外には限られた人数の医療スタッフしか勤務していません。専門の医師の診察や、精密な検査がすぐに受けられない場合があり、別日に改めて受診しないといけません。費用は、休日・夜間料金が加算されます。再受診する場合は、その診察代も余分な負担です。今後、状況が改善しないと、患者の負担はより大きくなるかもしれません。



本当に今夜が正解？ 受診の時間

いざというとき、受診できる場所があるから安心できる

夜間救急を利用したのは、1月の3連休中に息子が高熱を出したとき。普段調子が悪いときは、日中にかかりつけ医に行くんですけど、微熱だったから最初は様子見をしていました。でも土曜日の夕方、急に39度6分まで熱が上昇。前日受けた予防接種の副反応なども心配でした。**かかりつけ医は開いてないから#8000（※）に電話**して、受診可能な市外の病院を教えてもらい、その夜と翌日、そちらに行ってインフルエンザの検査をし、座薬をもらいました。連休中に原因は分からなかったけど、家で不安に過ごすより、**診察してもらった安心感がある分、気持ちは楽**になりましたね。

小さい子どもの具合が悪くなっても、どこが悪いのか、痛いのか、親では判断しきれないとき、とても不安ですよね。お医者さん不足で、いざというときの夜間救急がなくなったら困るので、**私たち受診する側も考えて正しい利用を**していきたいですね。#8000も待たされることはあるけど、頼りにしています。

子どもや自分が体調を崩したときは、どうしても焦ってしまいます。今、受診できる病院の情報がどこかに明確にあれば、とっさのときでもパニックにならずに動きやすいんじゃないかなと思います。

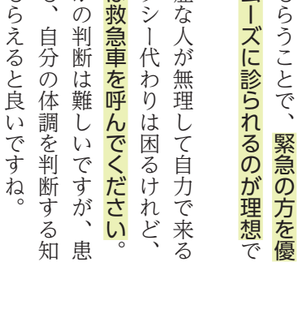
（※）小児救急医療電話相談。6ページ参照

夜間救急を利用した
清水可織さん・**駿太**くん

夜間、11万人に対して医師は1人

救急当直で働くのは月に2、3回。インフルエンザなどの流行期や夏の猛暑が続く時期は救急の方が増えますね。22時を過ぎると、**市民11万人に対して内科医師は僕だけ**、という状況に。患者さんが多いときや、重症対応時には**不眠で次の日の仕事になることも**。医師も高齢化する昨今、5年後、10年後も今の救急医療体制を維持するのは難しいと思います。

軽い症状で深夜に昼間と同じ感覚で救急受診するのは、若い方に多いようです。**休日、夜間の救急は「開いているから行く」のではなく、緊急の方のため**のもの。歩いて救急受診する方は、軽症で一晩様子見でもいい場合がほとんどです。軽症か緊急か、普段元気な方が自分で判断するのは難しい場合もあるからこそ、**日常的に健康管理や体の相談ができる、かかりつけ医を持つことが大切**だと思います。



救急医療に携わる
村上重人医師（内科）

早く診たいのに診れないジレンマ

夜間、病院に来る人の中には、待ち時間が短いからという方や、明日から大事な用があるから今日診て、という方もいます。そういう人が増えると、**本当に入院や手術が必要な人をすぐに診れない状況に**なってしまいます。具合が悪いから急いで病院に行っても、当直の先生は必ずしも症状にあった専門の先生とは限りません。詳しい検査ができる昼間に出直す必要だって出てきます。皆さんに考えて利用してもらうことで、**緊急の方を優先的に、スムーズに診られるのが理想**ですよね。

反対に重症な人が無理して自力で来ることも。タクシー代わりは困るけれど、**必要なときは救急車を呼んでください**。緊急かどうかの判断は難しいですが、患者さん自身も、自分の体調を判断する知識を蓄えてもらえると良いですね。

救急医療に携わる
高橋美鈴看護師

緊急じゃない夜間の受診は子どもにも負担

子どもは治るのが早い分、悪化するのも早い場合が多いです。もし夜間、**急にお子さんの体調が悪くなったときは遠慮なく病院に**来てください。ただ数日前から熱が続くような状況であれば、日中にかかりつけ医に行くのが良いですね。

夜間の来院の際は、先に電話があるとありがたいです。症状を伺って緊急でなければ、夜の寒い時間に来てもらう必要がなくなるし、十分な検査ができず再度来院してもらう手間も防げます。特にインフルエンザだと、発熱後すぐの診察だと診断が出ない場合があります。そうなると、待ち合いでだいぶ待ったのに処方されるのは熱さましだけで、後日にまた来院となることも。保護者にもお子さんにもしんどいことだから、**電話することで、お互い負担のない診察**ができるようにしたいですね。

小児救急医療に携わる
加賀田敬郎医師

かかりつけ医の目線から

普段から子どもを観察し、賢い親御さんに

地域の医院として普段から心掛けていることは、子どもをトータルに診ること。何か心配事があって来院する患者さんに症状、経過などをきちんと説明することで納得、安心して帰ってもらうことです。

保護者の方にお願いです。**お子さんの様子を普段も病気時もしっかり観察**してください。具合が悪くなったとき、前のときと比べることで、緊急度を判断できると思います。**いつもと違っておかしい場合は時間外でも迷わず受診**してください。「何かおかしい」という言葉にハッとさせられることがしばしばあります。

休日夜間急患センターでは、少ない人数、高齢化の中で医師もがんばっています。**救急医療を利用する際は「当然」ではなく感謝の気持ち**を持ってもらえると、患者さんと医療者の関係はより良いものになると思います。

開業の立場で小児医療に
携わる　**髙橋 貢**医師

救急医療を守るために私たちができること

かかりつけ医を持ちましょう

体調がおかしいと思ったら早めに受診！

日常的な診療や健康のことなどを広く相談できるのが、かかりつけ医。不調を感じたら、早めに受診しましょう。普段から病気の知識を増やすことで、急な病気やけがに余裕を持って対応できます。かかりつけ医を持つことは、自分の身を守ることにもつながります。

NO コンビニ受診

自分の都合だけでは利用しない！

軽い症状なのに自分の都合で救急外来を利用するのが、コンビニ受診です。「コンビニ受診を控える」のは「無理して我慢する」ことではありません。症状や緊急性に応じて、かかりつけ医や一般の医療機関、当番病医院などを使い分けましょう。

みんなを守るために知っておきたいこと

救急車は必ずサイレンを鳴らして向かいます

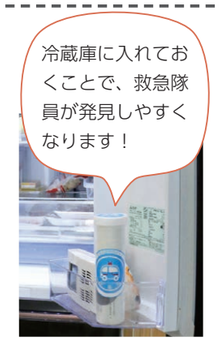
“救急”だから、サイレンが必要。「鳴らさないで」という要望の対応中に、次の救急の電話が来るかもしれません。

自分の命を守るためにできること

救急医療情報キットを活用

医療情報や保険証・お薬手帳のコピーなどをまとめておくと、救急の際、素早く適切な処置が行えます。キットは市内在住者に無料配布しています。

問合せ　市庁舎本館１階　高齢介護課
TEL0897－52－1292



市長からのお願い

西条市の救急医療の崩壊を防ぐために

西条市長　玉井敏久

今、患者となる私たちの受診マナー・モラルが変わらなければ、近い将来、当市の救急医療は崩壊します。

地域医療を維持していくためには、市民の皆さんが救急医療体制それぞれの役割や機能を正しく理解し、症状に応じた医療機関を適正に受診することが大切です。

地域医療を支える医師・医療スタッフも１人の人間です。医療はサービスではなく、限りのある資源です。この地域の救急医療を守るため、患者となる私たちの受診マナー・モラルが問われています。

急に具合が悪くなったら

休日・夜間

緊急を要する

「１１９番」に電話して、救急車を呼びましょう

救急と判断されるときは、迷わず救急車を呼んでください。

救急車を利用するのはこんなとき

○呼んでも返事がない（意識がない）
○急に激しい頭痛・胸痛・吐き気がある
○呼吸が苦しい、顔が真っ青、息をしていない
○けいれんが続いている
○急にろれつが回らなくなった、手足の動きが悪くなった
○車にはね飛ばされた
○高いところから転落し、大きなけがをした
○大量に出血している　など

判断に迷う

当番病医院を確認し電話先の指示に従いましょう

「病院に行く方がいいのか」「救急車を呼んだ方がいいのか」「どこの病院に行けばいいのか」…などの判断に迷うとき、まずは当番病医院案内テレホンサービス（下段参照）などをご利用ください。当日の当番病医院を確認できます。

受診前に必ず電話を

受診前に当番病医院へ電話し状況や症状を伝えることで、無駄な受診を防げます。

自宅で安静にするか、自分で病院に行くか、救急車を呼ぶか、電話先の病医院の指示に従いましょう。

自分で行ける

急患センターや在宅当番医で受診しましょう

入院や手術が必要と診断された場合は、直ちに二次・三次救急医療機関へ誘導されます。

休日夜間急患センター
野々市40－1
TEL0897－52－2001
診療時間
○月～土曜日　19時～22時
（内科、土曜日のみ外科あり）
○日曜日・祝日　９時～18時
（内科、外科）

在宅当番医
診療時間　月～金曜日
19時～22時（外科）
※テレホンサービス（下段参照）などで確認できます。

行く病院に迷ったときは

○当番病医院案内テレホンサービス
TEL0897－58－2200
○広報さいじょう当番病医院ページ
（今月号は25ページ）
○市ホームページ
○えひめ医療情報ネット

▼市ホームページ　▼えひめ医療情報ネット

症状の判断に迷ったときは

●大人・子ども
全国版救急受診アプリ「Q助」
該当する症状を画面上で選択していくと緊急度や対処法が表示されます。
詳細やアプリのダウンロードはこちらから▶

●子ども
○電話相談 ＃8000
医師・看護師などの専門家がアドバイスします。
相談時間　19時～翌朝８時
携帯・プッシュ回線　＃8000
全ての電話　TEL089－913－2777

○Webサイト「こどもの救急」
症状に合わせた対処法や、家庭での事故を防ぐポイントを掲載しています。
対象　生後１カ月～６歳児